

地震の後の暴徒の騒ぎで、混乱の二日の夜が明けると、憎らしいほど明るい初秋の朝だった。とろ／＼と眠ったと思ふと裏の家の女の叫び声で眼がさめた。狂犬が川の中で暴れてゐるといふ。笑の虫がひよいと首を抬上げた。

(秋の朝)

「誰れ彼れ曰」

(曲水 9-2)

◇家も潰れず焼けもしないで、震災後直に逃出すやうに関西落ちを
行い、企てつゝ、ある芸術家が尠くないさうだ。ある賢さに敬服する。
一方、壮語しつゝ、踏止まる決心の人々もあるさうだ。悲鳴に似た勇
壮さにもまた敬服するが、多くの芸術家にとつて、離れたきは寧ろ
震災前の東京、止まりたきは震災後の東京ではなかつたか。兎に角、
新なる東京の建設に、真摯な芸術家に據つて黙々と据ゑられる礎の
一つ二つはありたいと思ふ。

◇この巨きな震災を胎として、若しも生れ出づるいゝ芸術があつた
なら、それは、悲劇でなくて恐らく喜劇であらう。深い悲劇を味は
して、しかも優れた喜劇、それが何故とはなしに待たれる気がする。

(曲水 9-4)

◇曲水を見る度、諸氏の名をいつも懐しみをもって拾ふ。入り代り
立代りの人々の中に創刊以来いつも不変の態度で不断に作句に親し
んでゐられるらしいのが、冷熱の烈しい自分を省るにつけ、まことに
床しい。

(曲水 9-7)

◇近頃改革をやつたホトトギスを見た。二百幾号あたりから暫く親
しんだ當時を思出しながら、何故か淋しかった。——日本橋の榛原
が老舗の看板を外して、此頃、丸ビルの中でメリヤスシャツを売り

ゴム人形を売り、更に自転車までも売るのが見た、それにもまして
うら淋しい氣持だった。

〔批評・主張・後記〕

曲水十一月号を読みて

(曲水 4-7)

諸家の近咏、雪鳥さんと三重吉氏の蕪村の句に就ての話は非常に
面白く拝見いたしました。殊に蕪村句解の方はいゝものと思ひます。
俳句は俳句ばかりでは解釈が難かしいもの、俳人だけで解釈してし
まふのでは充分でないといふやうな点を今更ながら深く考へます。
三重吉氏の葉書の文句。小生竊かに思ふにのあたりさすがに文章上
に惨憺たる苦心をした方だけあつて、一寸した言ひまはしにもいゝ
しれぬ味ひが溢れてゐて愉快に思ひます。

前田さんのペンキ塗り立て論はどんなものでせうか。いつかのホ
トトギスの余白にもあの句の推奨文があつたやうに思ひましたから、
今更愕きもしませんでした。これが我々にとつて、尠くとも前田
さんにとつては開拓すべき俳句の道の、何か天啓で、もあるやうに
言はれてあるのは少しどうかと思ひます。全文かなり感激の文字
でつらねてあるのも少しあきたりません。尤も私にはまだあの句の
真髓を味はふだけの力がないゆゑかもしれませんが、とにかく、一
概に推奨し感服してしまふ先に、一通り句全体の品位といふやうな
点へも眼をとどかせて然るべきではありませんまいか、どうしても
「青蛙おのれもペンキ塗りにたてか」といったのでは、堂々たる俳句
としての品位はないやうで、所詮短冊ものではないやうに考へます。
ペンキ塗り立てかと言つただけでは、どうしても奇抜な言ひ廻し、
思ひつき、でなければ、どんなものだと見せつけたか、何処かにそ